

キモオタ調教シリーズ part2

F★te/調教★
DREAM CLUB

~キモオタに飼われた魔法少女達~

DREAM CLU

「ハアハア……」

公園に美少女が倒れていたから思わず保護してしまったお……」

「……う、うう……み、ゆ……る、び……」

「かわいそうに、こんな苦しそうにうなされて……」

「な、何があったんだらう」

「あ、う……」

「君！ 大丈夫かい？ 君い！」

「……」

ハア

ハア

ガッガッ……

「つく！ 意識も呼吸も極めて微弱だ！ このままじゃいけない！
早く手当をしなければ！」

「でゆふふ……この場合の適切な処置といえば……」

「もちろん人工呼吸だよね！」

「ハアハア……見れば見るほど綺麗な子だなあ……」

「い、今助けてあげるからね！」



「んぢゅる...! ぢゅる...! ぢゅる...! ぢゅる...! ぢゅる...!」

『んぢゅる...! ぢゅる...! ぢゅる...!』

「んぢゅる...! ぢゅる...! す、す、す...! これが×学生の唇...!」

『...も、も、も...!』

「ち、小さくって柔らかくて...なによりも、この背徳感がたまらんッ!」

『んぢゅる...! ぢゅる...! ぢゅる...! ぢゅる...! ぢゅる...!』

「おう! い、意識がないのに僕の舌に吸い付いてきた!」

んぢゅる...
んぢゅる...
んぢゅる...

んぢゅる...

んぢゅる...

んぢゅる...
んぢゅる...
んぢゅる...

んぢゅる...

『んッ...ちゅる...ちゅる...ちゅる...!』
「...これはエロい! も、もっとキスすれば意識も戻るかも!
んぢゅる...! ぢゅる...!」

「あー……んっ……あッ」
「まだ苦しいのかい？ どれ、胸やお股をさすってあげよう……」
「んっ……あッ……はッ……」
「おふち！ この微妙な膨らみとおま○このプニプニ感が……」
「最近の×学生は発育がいいなあ……」



「フヒヒ……それになんだあ？」
「この子、乳首もコリコリで、おぱんちゅも湿って来てるんじゃないか？」
「あッ……んっ！ はあッ……あッ……」
「っ、声も段々色のぼくなつてきちゃって……ちゅッ！ もう「息だろー」

「んちゆるー！ ちゅぷう……ちゅゆるうー！」

「ハアハア……それにしても、美味しいお口だなあ……」

「う……うッ！ う……え？ んうッ！ ふうううー……ッ！」

「おお！ 気が付いたのかい！ 良かったよかった！」

「な、なにこれ……んぐッ！ ちゅぷう……い、いやあ！」

「なんで私知らない人とキスして……」

「アッ！」

「うわぁ」

「ハア」

「いち」

「いち」

「アッ！」

「公園で倒れていた君を僕が介抱して上げたんだよ？」

「そ、そんなの知らない！ は、放して！ むぐうッ！」

「ちゅぷう……フヒヒ！ 自分から吸い付いて来たクセに……」

「さあ、もつと王子様のキスをあげるお！」

「や、やめ……いやッ！ いやあッ……！」

「んぢゆる！ ぢゅぶう！ ど、どうだい？ 気持ちいいだろ？」

「んうううッ！ いやッ！ し、舌が入って来て……」

「や、やめ……んぢゅぶう！」

「ぢゆる！ ぢゆるる！ ハアハア……」

「ほ、僕とのキスを忘れられなくしてあげるお！」

「い、いやあ……気持ち悪い！ 気持ち悪い！！！」

「ほ、ほら、乳首もおま○こもクリクリしてあげる……」

「んあッ！ あッ……あうッ！ やめて……か、身体がビリビリするう！」

くじけ

くじけ
にち

くじけ

ハア

ハア

ガッガッ……

ハア

「フヒヒ……口では嫌がっていても身体は正直なようだねえ……」

「イジめる度にエッチに反応してるお！」

「んぢゅぶ！ んぐ……な、なんで……嫌なのに……」

「からだ、熱くて……ヘント……」

『や、やめ……もうキスなんてイヤあ！』

お、おかしくなっちゃ……んうう！』

『おかしくなっちゃえはいいさ……』

そらー！ んぢゆるー！ ぢゅぶうー！ ぢゆるるるー！』

『んぢゆるー！ ぢゅぶう……あッ！ はあッ！』

な、何か来る……へへ、へんになるうー！ んぐうッ！』

ズクッ

ゴゴゴ

ズクッ

くちゅ
にち

くちゅ
にち

「デユフフ！ ひよつとしていつちやうのかな？

いやらしい子だなあ……そらー！ 僕とキスしながらイツちやえ！』

『ぢゅぶー！ んうー！ ぢゅぶうー！ んうううー……ふううー……』

「デユフフ！ ×学生のマジイキキタアツ……」

もつともつとイかせてあげるおー！』

『や、やめて！ 触っちゃダメエ……！ はあッ！ ふああーッッ……』

『ふぁ……あッ……ああ……あッ!』
『デュフフフ! 思いつきりイっちゃったみたいだね!』
『そんなに気持ち良かった?』
『うあ……な、なに……これ……か、からだか……ふわふわする……』

「おふう! と、トロけた顔も……た、たまらん!
股間がピンピンに膨れ上がってしまうお!」
『いやあ……なんなの……この人……きもちわるい……』
『うう……助けてよ……るび……美遊……どこいっちゃったの……』
『ダメ……なんだか……意識が……遠退いて……あ……う……』



《起きて……起きて……イリヤ……》

『あう……うう……んツ……ふあ？』

ふえ……ええ！ み、美遊うツ！』

《ふふ……やつと起きたあ……イリヤあ……》

『ど、どうして美遊が……って、私もなんで変身して……』

《イリヤはこの姿が一番カワイイから……》

ルビーを脅して服だけ変えて貰った》

『る、ルビー？ ルビーがいるの？ ど、どこ？』

《はああ……イリヤあ……ずっと会いたかったあ……》

ずちゅ

ずちゅ

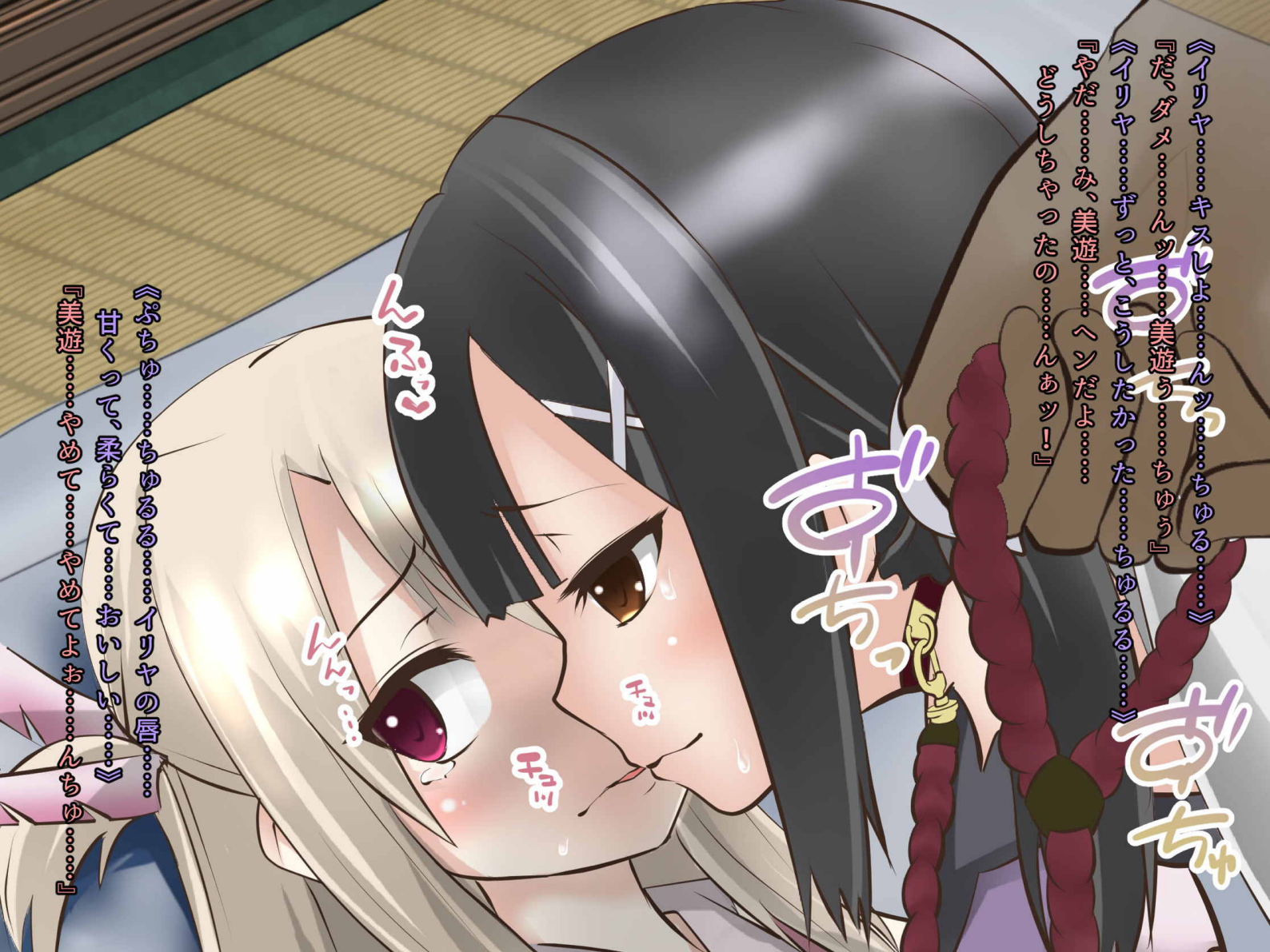
んふい

えい

『み、美遊……ちよつと……どうしたの？』

《もう離さなら……イリヤは私のもの……》

《……もう離さなら……イリヤは私のもの……》



《イリヤ……キスしよ……んツ……ちゆる……》
 『だ、ダメ……んツ……美遊う……ちゆう』
 《イリヤ……ずっと、こうしたかった……ちゆるる……》
 『やだ……み、美遊……へんだよ……
 どうしちやっただの……んあッ!』

ずちっ

ずちっ

んんん

んんん

んんん

んんん

《ぶちぶち……ちゆるるるる……イリヤの唇……
 甘くっして、深きく……ささ……》
 『美遊……やめて……やめて……やめて……んちゅ……』

「ふあッ！ はあぁーッッッ！」
「み、美遊！ どうしたの！ 大丈夫！？」

ずちゅ
ずちゅ
ずちゅ

「へ、平気……はあッ！」

あッ……んあッ！ はあぁーッッ！」

「な、なんで急に苦しみだして……」

「はぐッ！ あッ……んああッ！」

「ダメです……今はイリヤと……はあッ！」

「うう……どうしちゃったの……へんだよ美遊……」

「ごめんなさ……イリヤあッ……」

わ、私……気持ち良くなってえ……ふあッ！ やあぁあッッ！」

「……うう……そんな、エッチな声出さならで……」

私までへんな気持ちに……」

「はあッッ！ ああ……いっ、いっよお？」

「イリヤも一緒に気持ちよく……主人さまと一緒に……」

『……主人……さま……』



「デュフフ！ どうだい美遊たん？ 僕のおち○ぼは？」

《はぁあッ！ いい！ きもちいいです！》

「ご主人さまのおち○ちん奥までズンズンきてますう！〜！〜！〜！」
「な、なにこれ……なによこれえ！ ワケわかんないよお！」

「デュフフ……いやあ……」

美遊たんの気が済むまでさせて上げたかつたんだけどねえ、
ガマン出来なかつたよ」

《はぁあッ！ あッ！ もつと突いて下さい！ ご主人さまあ！〜》

「くほお！ ロリマ○コ締め付けるうう！」

やっば×学生はサイコーだお！」

あぁ♡
ほほ
ずちっ
ずちっ

「夢だ……夢だあ！ こんな夢だあ！」

《はぁあッ！ すごくですう！》

「主人さまのおち○ちん……おま○こ、壊れちゃいそうです……」

「ぐふふ……いやあ、まさかあんなに真面目だった美遊たんが、

こんなにもエッチになるなんてねえ……」

「ほりゃイクよ美遊たん！」

「ロリロリおま○こにナカダシいい〜!」

「ふああツ!! はああ〜ツツ!!」

「つくう! イキ締めキツうう!! 何回でも出ちやいそうだお!」

「はああツ! はいってきますう!」

「ご主人さまの熱いセーエキ! 私の子宮にいっぱい!」

「でゆふふ! まだまだでるおお! 全部受け止めるんだよ!」

「やああツ! だ、だめ……」

「もう入らない……んツ! はああーツツ!!」

「ふああツ! ああツ! おち○ちんピクピクしてえ……」

「まだ、来る……来てる……奥まで精子が……ああツ!」

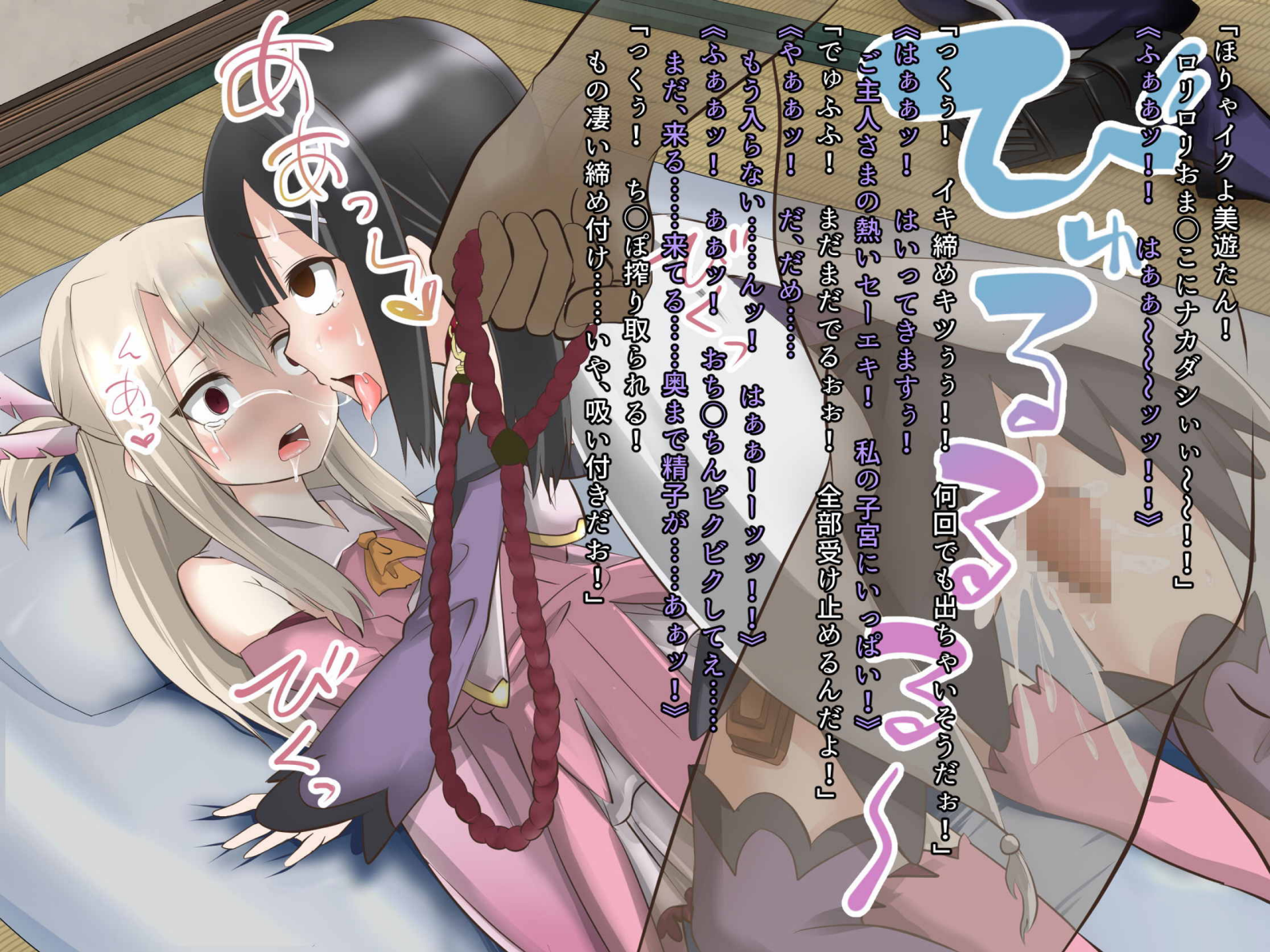
「つくう! ち○ぼ搾り取られる!」

「もの凄い締め付け……いや、吸い付きだお!」

「あぁっ!」

「びんっ!」

「んあっ!」



《はあ……はあ……あッ！ ああ……すごい……》

「こんなにくっさん……ナカが、いっぱい……嬉しいです……」
「フヒヒ！ 美遊たんが喜んでくれて僕も嬉しいおー！」

《はあッ！ やあ……動いたら、セーエキ、溢れちゃいます……》

「それにしても、いつもより盛大にイッたねえ……デュフフ！」

「大好きなイリヤさんにエッチなところ見られて興奮しちゃったのかな？」

《ああ……そんな……恥ずかしいです……》

「な、なに……なによこれ……どうなってんの……わかんないよ……」

《わからなくていいの……イリヤ……》

「あなたは私が幸せにしてあげるから……」

「やだ……もうやだあ……」

「家に帰ろうよ美遊……お願いだから……ううう……」

んんんんん

んんん

ハ
ア

おぼろ

「でゆふ！ 散歩に来たらまたエロい×学生に遭遇してしまった……
よくよく縁があるなあ……」

【な、なにコイツ……きやあツ！ さ、触らないで！
い、今触られたら……はあん！】

「そのの茂みでオナミしてた子が何言ってるんだい？
さあ、僕が手伝ってあげるよ」

【ち、違うわよアレは……い、色々事情があるのよ！】

「はあはあ……ピチピチの小ぶりなおっぱいにお尻……これはたまらん！」

【こいつ話聞いてないし……ひうツ！ あツ……はあツ！】

んん……

んん……

んん……

んん……

んん……

んん……

「フヒヒ……もう身体は出来上がっちゃってるみたいだね……」

【はああツ！ つくあ……あツ！ な、なんで……身体が、おかしい……】

【アソコになにか挿入ってくる感じがする……】

【なにも、ないのに……はぐツ！ あ……ああ……はあツ！】

「さあ、僕に身をゆだねて……たっぷり気持ちよくしてあげるお！」

【ひやうツ！ はあツ！ ちょ、直接……】

「フヒビ……褐色肌にピンク色の乳首がエロいねえ……」

おま○この中も桜みたいにキレイだお！」

【はあツ！ んツ……そんな触っちゃ……あぐツ！

はあああー！ー！ツツ！ー！】

（な、なんなのよさつきから……）

アソコが、なにか太いので掻き回されてるみたいな……）

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

（こいつの指じゃないし……まさか、イリヤの方から流れてきてる感覚？）
（っっていうか、肌から流れ込んでくるコイツの魔力……なんて、強くて……）

「どうだい？ 気持ちいいかい？」

【き、きもちい……ひぐらツ！ ああツ……はああツ！ー！】

【いやあ……だめえこんなの……すぐ来るう……来ちゃう……

あツ！ はああツ！ー！】

【きゅうう~~~~ツツ!!】

「おつと! 手マンだけでイっちゃったのかい?」

【あぐツ!! あツ……ああツ!!】

な、ナカで……ナニか……なにか暴れてえ……あぐツ!!】

「え? 僕まだ挿入れてないけど……ちよつと危ない子なのかな?」



(い、イリヤ……あの子……今ドコでナニしてんのよ……)

「フヒヒ! イった顔もカワイイねえ……僕ん家の子にそっくりだよ」

【え? な……なに?】

「気に入っちゃった……でゆふふ……」

「もつともつと気持ちよくしてあげるよ!」

【や、やめ……ひやうツ！ あッ……あああ……ッッッ！】

「元から感度もいいみたいだけど、
イッたばかりだから余計に感じちゃうでしょ？」

（い、イリヤの感覚がダブって……か、身体中が犯されてるみたいだ！）

「ピンビンの乳首も、ぐちよぐちよの口○ま○こも、
もつと弄ってあげるお！」

あん♡

ん♡

ん♡

ん♡

ん♡

ん♡

【い、いや……ああッ！

だ、だめえ……そ、そんなにしたら……あぐうツ！】

【ああ……き、気持ちいいのが……と、止まらない……

はあッ！ ああッ！】

【だ、ダメ……こ、これ以上は……はあッ！

と、トぶう……トンじゃううツ！】



【ああッ！ ああああ~~~~~ッッッ！】

「おふうッ！ ×学生のマジイキキタあああ！」

そらそら！ イキながら弄ってあげるお！」

【んふうッ！！ ああッ！！ ああああッッ！！】

「でゅふふふ！！ イつたまんま帰ってこなくていいよ！

そらトんじゃえ！ ホントにトんじゃええ！！」

【だ、だめもお……ああッ！ はあああ~~~~~ッッ！！】

「こんなことされるの初めてでしょ？

今日のこと一生の思い出にしてあげるからね！」

【~~~~~ッ！！~~~~~ッッ！！】

「でゅふふ！ 声すら出せずに痙攣してるお！」

フッフッフ

【ああッ……あッ……あああ……】

「フヒヒ……ずっとイキッ放しだったね。」

「何回くらいいったのかなあ？」

【あッ……うッ……ああ……あッ！】

「お返事もできないか。美遊ちゃんも

イリヤちゃんもなかなかの逸材だったけど、

感じやすさとイキやすさは君の方が上だなあ……」

ひく

ひく

ひく

ひく

ひく

【みゆ……いり、や？】

「フヒヒ！ 気になるかい？」

「それじゃ、僕の家まで会いに行こうか？」

「今頃二人でお楽しみのはずだよ……」

「帰る頃には終わってるだろうから……」

「はあ……あッ！ あ……あ……」

【はあ……あッ！ あ……あ……これえ……】



《んツ！ はああ……イリヤ……》

ちよつと待ってて……す々、用意するから……》

『や、やめてよ美遊……』

正気に戻って……こんなところ、逃げようよ……』

《……どうして？

私はその必要を感じない》

『だって、あんな、ヒドいことされてるのだから……』

ほら、今ならアイツもいらいし……』

《私が頼んで出かけてももらったから……》

『ぞ、そうなの？ どうして……』

《さっきみたいに邪魔されたくないの……》

イリヤとの、初めてだから……》

『や、やめてよ美遊……』

そ、そんなトコロに、そんなもの挿入れちゃ……』

《イリヤ……好き……愛してる……》

『や、やめて美遊……ふあツ！ あツ……あああツ！』

「はあぐらッ！ やあッ！ は、挿入って……あッ！
やめてえ！ やぶれける！ やぶれちゃうー！」

「あッ！ イリヤとの初めて……
イリヤの初めてが私のもの……うふふ……」

「でも、ごめんね、イリヤ……」

「わたしの初めては、ご主人さまに奪われちゃった……」

「痛い……痛いッ！」

「抜いて美遊……お願い抜いてえ！」

「大丈夫……すぐ気持ちよくなるから……」

「んッ！ はあッ！ はあッ！ はあッ！」

「ああッ！ イリヤのナカ……感じる！」

「私、イリヤとひとつに……」

「痛いよ……やめて美遊……やめてえ！」

「ごめん、イリヤ……私だけ、ちよっといつちゃった……」

「美遊……なんで、こんなこと……もうやめてよお……」



「らッッ！ う、う」らちや……あッッッ！

《すごい……感じる……イリヤのナカ……
すごく柔らかくて……きもちいい！》

「や、やめてえ……あッッッ！」

「こわれる！ こわれちゃううう……」

《あッ！ はああ……ふふッ、

イリヤの泣き顔……カワイイ……もっと見たい》

「あああッ！ ナカが……わ、私のナカが……
ぐちゃって……ぐちゃってるう……」

《はあッ！ イリヤの子宮にゴリッしたら……
反動が、私の奥まで返ってきて……あッ！》

あッ♡

あッ♡

ず♡

ぞほ♡

ぞほ♡

ず♡

「やめて美遊う！ 死んじゃう！」

「こんなことしたら、二人とも死んじゃうう！」

《大丈夫だよイリヤ……》

「いつつしよに、気持ちよくなる……んあッ！」

《はあ……はあ……いつちやった……イリヤといっしょに……》

『あッ……ラッ！ なに、今の……頭、真っ白になって……』

《イリヤ……ねえ、もう一回……》

『やめて……もう無理……』

美遊……なんでこんなことするの……』

《……だって、イリヤのこと好きだから……》

『それでも、こんなのぜったいおかしいよ……』

《何も考えなくていいの……》

なごもかも忘れて……私だけを見て……イリヤ……》

ふん

んん

んん

んん

んん

んん

『あッ！ も、もうダメ……ムリ、ムリだから……これ以上は……死んじゃうから……』

《大丈夫……私も、最初はそう思ったけど、すぐに慣れたから……んッ！ ふあッ！》

『あッ！ やだ……やだ……やだ……もうやだ……』

「でゅふふ……ほおら、みんなの大好きなおち○ぼだよ？
仲良くペロペロしてね？」

《ご主人さま……はああ……ご主人さまのおち○ぼ……スナキです……》
「これ……すっごい……」

舐めてるだけで魔力が満ちてきて……」

「うう……臭い……汚いら……」

もうやめてよ美遊……クロまで……」

「だってしょうがないじゃない……」

こんな上質の魔力、

一度知ったらやめられないもの」

「ふあ……んツ！ 身体がウズいて、

熱くなってきたちやう……はあ……」

「くう！ クロちゃんのエロい吐息が亀頭を包むう！」

《ご主人さま……私も……んちゅ……》

「おう！ 流石、僕が鍛えた美遊ちゃん！

テクニックが一番だね！」

「うう……この人、気持ち悪い……」

「でゅふふ！ イリヤちゃんの初々しさもいい味出してるなあ……」



「そらー！ もっと頑張ってペロペロするんだ！」

「ふぁッ……んッ！ 舌が……トロけそう……！」

《はぁ……ちゅぱッ！ あッ！ ご主人さま……気持ちいいですか？》

「うう、二人のツブと、おち○ちんの味で……だんだんへんな気分……！」

「つく！ これは絶景！」

美○女3人がエロい顔で僕のチ○コを舐め合ってるだなんて！」

「ちゅるー！ ちゅ……うふふ、ピクピクしちゃって、カワイイ……！」

《ご主人さま……いつでも出してください……私たちの顔に……》

「美遊ちゃんはみんなでいっしょにぶっかけがお望みかい？」

ふひひ！ いいですとも！」

「きやう！ な、なに……急にはねて……！」





「つく！ イクうう！」

「きやはッ！ 出た出た！ すっごおい！」

《はああッ！ ご主人さまの濃いいセーエキい……きもちい》

うっ！

「きやあッ！ な、なにこれ……熱い！ 臭いいい！」

《ご主人さま！ もっと！ もっとかけて下さい！》

「いやあッ！ 美遊ばっかりずるい！ こっちももちょうだい！」

「くお！ そ、そんなにされたら……と、とまらん！」

びゅるびゅる

びゅるびゅる

ぐわ

ぐわ



「はあはあ……最後の一滴まで一気にでちゃったぞ」

「ちゅばツ……ちゅる……あん……すごい精液……魔力の塊みたい……」

《ふああ……主人さまのセーキがいつぱい……いつぱい……》

「し、白おしっこ？ なにこれ……痲気なの？」

なんで二人とも……

そんな気持ちよさをうたしてるの……」

「でゅふふ！ どうやらイリヤちゃんだけは、

まだまだお子さまみたいだねえ……」

「なによ……なんなの……もうワケわかんない……」

「大丈夫、イリヤちゃんも、すぐ二人みたいに

僕のおち○ぼ大好きにしてあげるからね……でゅふふふ……」

ぬせぐ

ぷに

ぷに

ぬせぐ

ぷに

ぬせぐ

「でゅふふ！ まるで夢のような光景！」

「うう、こんな格好……恥ずかしくて死にそう！」

「もう、お兄さまつてばヘンタイなんだから……」

「3人ともたっぷりジュースは飲んだよね？」

「今からおしっこガマン大会だよ！」

「ガマン大会ですか？」

「おしっこ……一番おしっこをガマン出来た子が優勝！」

「優勝したらどうなるの？」

「デュフフ！ 一番最初におち○ぽをあげるよー！」

「そ、そんなの絶対いらない！」

「でゅふふー」

「それならガマンせすたおしっこしちゃうんだお……らへんよー！」



「きゃあッ！ ああッ……な、ナカでブルブル動いてえ！」

《あう……振動がお腹まで響く……ひうッ！ んッ！ くああ……》

「ひぐッ！ い、イリヤの快感まで流れ込んできて……」

はああッ！……「これえ……キツい、かも……はああッ！」

「さて、誰が「番ガマン」できるかなあ？」

「ああ……あッ！ あたま、しびれるう……」

「こんなの……ガマンなんて……」

はっ……

「だ、ダメよイリヤ……あんたがイつたら私までイっちゃう……」

《ああ……んッ！ ……主人さま……こ、こんなのひどいです》

「ハアッ……ハアッ……」

ほら、もっと力を込めないと、すぐにお漏らししちゃうぞあッ。」



『んぎい……あッ！うッ……だめえ……詰さやう……』

『あ、脚がしびれて……た、立ってられない……はあッ！』

『んッ！くあ……あッ！うッ……』

『でゅふふ！かわいいお顔とお尻が三つも並んで……た、たまらん！』

『はッ……あッ！くッ……』

『んッ！うッ……あッ！はッ……』

『だ……め……んあッ！はう……』

『脚もお尻もプルプルさせて、みんな頑張るなあ……』

『ふひひ！そんなに頑張ってる姿を見せられたら……悪戯したくなってきたぞ！』

《ふあああ~~~~~ツツ!!》

「らやああツツ!!... おしりおー

とまらなれ! とまらなれらら...!!」

『やだッ! やだやだやだあ!』

「出なれええ! とまって! とまってええ...!!」

「ほふら! すすすっ!」

「三人一気になるとすっ! 迫力だ! だ、何らも...」

めあっ

『だ、だめえ! 見ないで! 嗅がないでえ! らやああ...!!』

「あ、あ、あ...」

お女様とらっしよにイヤながら持もあしめるの「おははははは...」

おははははは...

【あ、あ、あ... イリヤのおしりッ! が私のおしりッ! とまらなれ...!!】

《あ、あ、あ... イリヤのおしりッ! が私のおしりッ! とまらなれ...!!》

「らやあッ! らやあッ!」

もっ! イヤもっ! イヤもっ! イヤもっ! イヤもっ! ああ... ツツ...!!」



【はぁ……はぁ……でちゃった……せんぶ……はぁぁ……】

《すげえ……膀胱が、「気にからっぽ」なって……》

《あたまで、クラクラする……》

『うう……ふええ……なんで、』

『こんなこと……こんなの、おかしいよお……』

「お風呂場がみんなのおしっこでいっぱいになっちゃったねえ……」

「こりゃしばらく、お風呂入るたびに思い出しちゃうなあ……」

【やん……お兄ちゃんったら、ヘンタ〜イ……】

『この、野蛮人……チカン……』

「でめふふ！ それじゃ、結果を踏まえてご褒美タイムといこうか！」

「同時に見えて、ちゃんんと順番見てたからね！ でめふふふ！」

「フヒヒ！ まずはイリヤちゃんのおま○こいただきま〜す！」
「いぐツ！ ふツ！ だ、だめえ……」
「は、はいらない……そんな大きいの……」

「だ、だめえ……絶対だめえ！ いやツ！」

「やめてえ！ んぐうツ！ んうう~~~~ツツ……！」

「くう！ 処女は美遊さんに譲っちゃったから残念だけど……」

「流石ロ○マ○コ！ 処女のような締め付け！」

「んツ！ うう……信じられない！ 信じられない！」

「こんなカッコで、こんな奴だ……私……」

ぐふ、

ぢぢぢ

「あ、でも、生チ○ポで突かれるのは初めてだよね！」

「でゆふ！ どうかな？ 生まれて初めてのチ○ポの味は！」

「痛い……熱い……気持ち悪い……抜いて……お願い抜いてえ……」

「おやおや素直じゃないなあ……」

「下のお口はこんなに僕のチ○ポを締め付けてるのに」

「ウンだ……こんなのウンだ……ウンだ……」

「絶対ウン……ふあツ！ はああツ……！」

ぢぢぢ

「さして！ しつかり窓枠持っててね！ 動くよ！ イリヤちゃん！」

『はあぐツ！ い、イヤ……奥まで挿入ってきて……うぐうツ！』

「はあはあ……イリヤちゃん！」

イリヤちゃんの子宮におち○ちんゴリゴリしてるお！」

ぐはっ

んんっ

ぐふっ

ぐはっ

『うぐう……あツ！ はああ……んぐツ！ あうツ！』

「フヒヒ！ 分かってるねえ……しつかり声を押さえるんだよ？」

誰かに恥ずかしい姿を見られちゃうかもだからね！」

『さ、サイテー……んあツ！ あツ！ ぐう……はあツ！ あツ！』

（こ、声が出ちゃう……で、でも手を離れたら、窓から落ちる！）

『はあツ！ あツ！ ふぐう……うツ！』

「んくツ……ふあツ！ あツ……はあツ！」
「でゆふふ！ 段々とエロい声になってきたねえ……
気持ちよくなってきたの？」

んくツ

「やめて……もうやめてえ……怖くて……
痛くてえ……恥ずかしくて……あうツ！」

「あんツ！ そ、そんなに突いたら……
お、落ちる……落ちちゃう！」

んくツ

んくツ

「フヒヒ！ 大丈夫だよ……
イリヤちゃんは今、僕と合体してるんだから！」

「ほら！ わかる？ 僕の子○コが
イリヤちゃんの一番奥深くまで差し込まれてるの！」

「いやあ……あぐツ！ あツ……ああツ！
や、やめて……痛い！ 怖い！」

んくツ

んくツ

「つく！ そんなに締め付けたら……
ああツ！ もうガマン出来ない！」



「ふおお！ イリヤさんの子宮に直接膣内射精いい！」
『いやあッ！！』
な、なんか出て……あう！ 熱い！ 熱い！』

「ああ！ 挿入っていくう！」

僕の精子が！ イリヤさんの純潔の子宮に……！」

「あッ！ あッ！ あッ！ あッ！」

なにされてるの！ なによコレえ！！』

「気持ち悪いいい！！ ナカでビクビク跳ね回って……」

は、入ってくるう！ なんかヘンなのがぁ！」

『いやあッ……ああ……はあッ！』

あッ！ あッ！ あッ！ あッ！ あッ！ あッ！ あッ！ あッ！ あッ！ あッ！

びく

びく

びく

びく

「ふううう……出た出た……もう金玉カラツカラだよ」

『あッ……う……う……』

「どうだいイリヤたん、僕のドロドロザーメンの感想は？」

いりやたん

ひん

ひん

ぐんぐん

ぐんぐん

『なによ……何言ってるのかわかんないよお……』

『あう……あッ！ し、白いおしっこがあ……』

私のナカから……垂れてきて……』

『そ、そんなあ……こ、これが……』

私の身体のナカに……い、いっぱい……いっぱい……』

『う……ううッ……もうやだあ……』

助けて……お兄ちゃん……お兄ちゃん……』

「さあお待ちませ、次は美遊さんの番だね」

《はあッ！ ああ……》

《ご主人さまのおち○ちん……嬉しいです》

「ぐふふ！ 自分から跨ってくるなんて、

美遊さんはすっかりエッチになったね！」

《はい……あん！ ご主人さまのおち○ちんと魔力……

とっっても気持ちよくて、大好きです》

《ふあッ……んッ！

亀頭がゴリゴリ、私の子宮に当たって……はうッ！》

ハハ

ずちゅ

ずちゅ

ずちゅ

うふふ

ハハ

「最初は泣き叫んでいたのに……いやあ……

真面目な子ほど堕ちるものだなあ」

《ご主人さま……もつと固くして……

たっぷり可愛がってくださいね……》

「でゆふ！ 自分で腰振っちゃって可愛いなあ……よしよし」
《ふあッ！ んッ……ご主人さまの手……》

「すごい……硬くて大きくて……ドキドキします」
「そうかい？ よしよし、いい子いい子……」

美遊たんはとってもエロくていい子だお！

《はあ……嬉しいです、ご主人さま……もつと頑張ります》

《ふあッ！ んッ！ ああ……あッ！》

「ふひひ！ 美遊たんは健気で献身的な姿がぐうカワだお！」

ズグズグ

ずちゅ

ずちゅ

ずちゅ

んっ

《んッ！ ああ……ふあッ！ ご主人さま……》

幸せです……ご主人さまに拾っていただいて……》

「僕も美遊たんを拾えて幸せだお！ たっぷり幸せになるうね！」

《はい、ご主人さま……んッ！ はああッ！》

《ああ……私のナカが、ご主人さまのおち○ちんで
いっぱいです……ふぁッ！ あぁッ！》

「さっきまでイリヤちゃんのカに挿入ってたおち○ぼだよ？

余計に感じちゃうでしょ？」

《い、イリヤの……んぁッ！ あッ……》

「言った途端、急に締め付けてきたねえ……

そんなにイリヤちゃんが好きかい？」



《んッ……ああ……あッ！ はい、大好きです……》

「僕のおち○ぼとどっちが好き？」

《い、イリヤです……ふぁッ！ んうッ！》

「ガーンだな。ちよつと傷つくなあ……

そういう子にはお仕置きだ！」

《だ、だめッ！ 強くしたら……んぁッ！ はぁぁッ！……》

「でゆふ！ 出来立て精子を美遊さんに注入うううッ！！」

《はぁぁぁーッッッ！》

「美遊たん、僕の精液気持ちいいかい？」

《はい……きもちいいです……あんツ！

し、子宮で、叩きつけられるみたい……》

あぁぁ

びびび

う

ア

オ

イ

エ

ウ

!!

《はぁッ！ あ……まだビクビクはねて……

子宮で……ううう流れ込んでます……》

《はぁッ……おのなる……あぁ……あぁッ！ あ、あぁおれすやう……》

《ふあッ……ああ……あふう……》

「でゅふふ！ 膣内射精されながらいつぱいイっちゃったね！」

《はい……いつぱい……イキましたあ……》

「よしよし……もっとエロくて良い子になるんだよ？」

ふー

《はあッ……あッ！ はい……主人さま……》

「でゅふふふ……楽しみだなあ……みんなのロ○マ○コが、お揃いで僕のチ○コの形になる日が……」

びく

びく

んふん

びく

《おそろい……イリヤと……》

ああ……してくだら……主人さま……》

「でゅふふ！ 美遊ちゃんはほんとうにいい子だなあ……よしよし」

《あん……ふああ……主人さまの手……》

《気持ちさらさら……と撫でておめら……》



「お待たせクロちゃん……クロちゃんの番だお！ そりゃ！」

「ま、まって……お兄ちゃ……」

「い、今、いったばっかで……あッ！ はああッッ！！」

「アレ？ なんだかおま○こが既に出来上がってるみたいねえ……」

「ああッ！ あ……ああッ！ す、す……いい……これが、本物……」

「イリヤからの感覚とは全然ちがう……」

「流れ込んでくる魔力で……い、意識とびそう……」

あんど

「ああ、そーいや美遊たんが言ってたっけ？」

「イリヤちゃんの苦痛がクロちゃんにも伝わるって」

「い、イリヤにとっては苦痛でも……」

「私にとっては、快感ってことかもね……」

「なんだか良くわかんないけど面白い関係だね！」

「よ……し！ 本物を気に入ってもらえるように頑張っちゃうぞ！」

「だ、ダメ！ い、今動いたら感じすぎて……あああーッッッ！！」

アッッッ

アッッ

アッッ

アッッ

「いやッ! あッ! はぁあッッ!」

「あれれ? ひよっとしてもうイっちゃったのかな?」

(ま、魔力が...魔力が多すぎる...う、受け止めきれない...)

「はぁッ! あぁあッ!」

「だ、ダメお兄ちゃん!! イってる! もうイってるからあ!!」

「デェフ! せっかくだし、」

クロたんは何回連続でイけるか挑戦してみようか!」

「だ、だめ...あ、頭が真っ白で...」

「からだ、痺れ...やぁあッ!」

「つくう! イキ締めきたあ!」

「そらそら! どんどん行くお!」

「いやッ! そ、そんなに子宮突いたら...」

「あぁッ! おかしくなる!」

「イキすぎておかしくなっちゃうう!」

グキョ
グキョ

グキョ

グキョ
グキョ

グキョ
グキョ

グキョ

「あうッ! あッ……くあッ!

「お、お兄さま……らめえ……もおやあッ!」

「でゆふふ! さっきからイキッ放しだねクロたん!

何回目かわかる?」

「ふあッ! あッ! わかんない……

もうなにもわかんない……!」

「僕も数えてないから安心してね?

でもひどいなあ……

「僕はまだ一回もイってないのに……!」

あへん

あへん

ズン
ズン
ズン
ズン
ズン
ズン
ズン
ズン
ズン
ズン

「いやッ! 奥う……りりしちゃう……はあッ!」

「クロたんは三人のナカで一番積極的なクセに……
責められると弱いんだね」

「はあッ! ああッ! お、おち○ちん奥まで来てえ……

イク! またイっちゃううう……ッ……!」



【いやッ！ さやあああーッッッ！】

「ふひい！ し、搾り取られるううー！！」

【ああッ！ 来る！ くるううー！！】

精子が……魔力があッ！

いっぱい流れ込んでくるううー！！】

【はああッ！！ だ、ダメ挿入らな……ああッ！！】

だめええーッッ！！】

「くああ！ 射精がとまらない！」

【ああッ！ ば、パンクしちゃう！】

子宮が、魔力回路がああッ！！】

はああーッッ！！】

【し、死ぬう！ 死んじやう死んじやうううー！！】

お願い抜いて！ 抜いてええ！！】

「うッ……あッ……はぁぁ……うッ！」

「ふう、出した出した……よく頑張ったね、クロちゃん」

「しゅっ……あ、あふれちゃう……」

「こんないっぱい魔力……はじめてえ……」

「美遊ちゃんもよくそう言うんだけど……」

「なんだ、そういう設定が学校で流行ってるのかな？」

くっくっ

どろろ

どろろ

ふっ

【ああッ……あッ！ うあ……ああ……】

「クロちゃんはお返事も出来ないくらい」

盛大にイっちゃうよね……いやらしい子だなあ」

【だ、だって……お、お兄ちゃんの魔力……」

す、す……すぎる……から……】

「フビビ！ 気に入ったなら毎日でもあげるよ？ 楽しみたしててね！」

【ああ……うッ……ふああ……はぁい……いっぱい……」

「ちようだい……せんぶ、受け止めてあげるから……あッッ！」

あつあつ
あつあつ
あつあつ

「でゆふふ！ 朝のお風呂は気持ちいいねえ……」

《はいご主人さま……あッ！ きまちゃんです……》

「ふあッ！ んッ！ あ……このボディソープ……
ぬるぬるして、おかしいよお……」



「ふひひ！ みんな昨日はたっぷり汗かいたからね！

全身でゴシゴシして、しっかりキレイになるんだよ？」

『いや……思い出したくないのに……』

【うふふ……お兄ちゃんったら、

あんなに出したのに、もう精液たまってるのね？】

「つくお！ クロちゃん！ そんなにゴシゴシしたら……」

【はああ……すっごくエッチなおい……

ちょうだい……お兄ちゃんの精液……もう一回……】



「お風呂の湯が熱い……」

【お風呂の湯が熱い……】

お風呂の湯が熱い……

あー、熱い……

んんんんん

《クワ……クワ……》

『ウウ……またその肩を叩いて……』

【ああ……顔にかかって……やんちゃ……】

熱ッ！ ふあッ！ ああッ……】

あー！

オオ



「ふう、まったくクロちゃんは悪戯っ子だなあ……」

「はああ……一晩でこんなに溜めちゃうだなんて……」

「お兄ちゃんってば絶倫なんだから」

「ああ……濃くって……ドロドロで……すごい匂い……」

《き、昨日のおしっここの匂いと、おち○ちんと、

精液の匂いが混ざって……あッ-

「ああ……へ、へんな匂いが

喉に貼りついちゃう……ふあッ

「みんなのエッチな体臭まで混ざってきたねえ……でゅふ！」

「いやあ……やめてえ……こんな匂い……ヤダあ……」

「とってもエッチな匂いじゃない……」

「嗅ぐだけでムズムズしちゃう……」

《はああ……ご主人さま……身体が、へんです……》

「でゅふふー！ こりゃしばらく換気扇は使用禁止だなあ……」



「ふううう……お外は気持ちいいねイリヤちゃん」

「うう……なんでこんなトコで……こんなカツコでえ……」

「そのコスプレエロいよねえ……でゆふふ！」

「イリヤちゃんの好きなアニメなのかな？」

「どうでもいいから……早く終わらせてよ……」

「あいかわらずイリヤちゃんはつれないなあ……あ、ツンデレなのかな？」

「この人……話通じない……」

「うう……ルビィ……いるの？ いないの？ いるなら早く助けて……」

うう……

ア……

ア……

うう……
うう……
うう……

——イリヤああーッッ!! どこだああ!!

『……ひいッ!』

たっつん! そんなところには居ないって!

——イリヤああーッッ!! オレはここだああ!!

——ああ! もうあのバカ一回捕まえる!

（み、皆の声……私を捜して!）

「おやおや、お友達かな? 誘拐……」

もとい、保護してから目も浅いのに、大げさだなあ……」

「んッ! くあ……あッ! んッ……」

ゆた

ゆた

ゆた

アッ

アッ

アッ

「でゆふ! どうしたんだい? そんなに声を抑えて……」
（こ、こんなところみんなに見つかったら……死んじやう!）
「ああッ! イリヤちゃんのその顔はキクなあ!」
「見つかったも面倒だし……そろそろいいかな?」

ギンギン

「きゃあッ！ やッ……はあッ！」

「ハアハアッ！」

い、イリヤちゃんの腋マ○コに精液吸い込まれるう！」

(うう……気持ちわるい……気持ち悪い……)

「ほら！ 顔にもかけるよ！ こっち向いて！」

「やあッ！ ああッ……あッ！ 熱い……臭い……」

——こっちかイリヤああ！ 絶対見つけてやるぞお！

はわッ！！

(こっちに来てる！ お願い早く終わってえ！)

「でゆふふ！ 精液とまんないお！」

イリヤちゃんは全身おま○こだね！」

「ふあッ！ ああ……やだ……やだあ……あう」



「ハアハア……よ、予想以上に出てしまった……」

「うあ……あツ！ ううう……」

「いっぱい精液シヤワー浴びちゃったね！

カワイイよイリヤちゃん！」

「うう……もうやめて……やめてよお……」

「おウチに帰して……お願いだから……」

「フヒヒ！ そうだね、早く帰って

美遊たんやクロちゃんと続きしようか」

びび

ぞろぞろ

『……………』

「おっと、みつかつちやうそだ……これは急がねば！」

ぞろ

ぞろ

「ふぁッ……んッ……ちゅ……お兄ちゃんってば、

イリヤだけ連れてっちゃうんだから……酷いわよね美遊？」

《ちゅる……ちゅ……クロのおま○こ……イリヤの味に似てる……》

「やんッ！ 美遊のおま○こだって……」

ちよっとお兄ちゃん味の味がするわよ？ ヤリすぎじゃない？」

くふっ♡♡♡

ふっ♡

《いっばい……してもらったから……んッ！》

「うふふ……美遊ってば、本性のエロさ全開ね……」

こんないけない子だったなんて驚き」

《クロだって……昨日、一番イってたのはクロ……》

「仕方ないじゃない……」

イリヤの分まで感じちゃってたんだから……あッ！」

くっ♡

くっ♡

「うふふ……イリヤってば、

お兄ちゃんに可愛がってもらってるみたい……」

《……せう》

めいっ♡♡♡

【きゃらうッ！ ちょ、ちよつと美遊……舌、そんなにしちゃ……あんッ！】
《クロは……イリヤとたくさんいっしょで、するら……》
【し、仕方ないでしょ？ 事情が事情なんだから……あッ！ はあッ！】

《ちゅるんッ……ちゅるん……ちゅるん……ちゅるん……ちゅるん……ちゅるん……》
【やあッ！ 美遊……そんなエッチになめちゃ……ふあッ！ んッ！】

《クロ……イリヤみたいで……ちよつとカワイイ……》
【もおッ！ さっきからイリヤイリヤって……ッのッ！】



「ふあッ！んッ……はあッ！」

「ちゆる……美遊のいやらしいおま○」

「クロ……だ、だめえ……ふあッ！あッ！」

あんっ

んっ

とろろ

「お兄ちゃんにいっぱい広げてもらったのね……
どんどん舌が挿入っていつちやう……」

「あッ！んッ……ふあ……あッ！」

んっ

んっ

んっ

んっ

「声もいやらしい……」

「あなたがこんな痴女だったなんて、ホントに意外ね」

「クロ……んッ！はあッ！」

「だめ……そんなにしたらあ……あッ！」



《はッ……んッ！ ちゅる……ちゅるばあ……》
 「んッ！ 美遊……焦らないで……はあッ！」

《あなたに、好き放題言われたくない……》
 「負けず嫌いね……身体はこんなに素直なのだ……んッ！」

《はあッ！ あッ……ちゅる……ちゅる！
 イリヤの味……んちゅるッ！ ちゅるッ！》

「またイリヤって……ちゅるッ！ 悪い子！」

「はあッ！ んあッ……ちゅるッ！」
 《んッ！ あっ……んちゅる！ あく……ちゅるッ……ちゅるッ……ちゅるッ……ちゅるッ……ちゅるッ……》
 「ふあッ！ んッ！ あッ！ ああ……んッ！ ちゅるばあ……ちゅるばあ！」

《ふううッ！ あッ！
 ああ……つ、強すぎ……んちゅるッ！》
 「はああ……んッ！ だ、だめえ……
 もう私……ふあッ！ ああッ！」



んっ! やあぁーっ!

ふぁっ! はぁぁーっ!



「ハア……ハア……やあ……あッ！」
「美遊ってば……」

「おもしろいみたい……」
「ふあッ！ あ……」

「クロだって……あう……」
「こんなに……あう……」

「お兄ちゃん早く返ってこないかしら……」
「美遊の魔力も悪くないんだけど、一度アレを知っちゃったら……」

「んッ……げんげん……」
「クロの汗液……イリヤの味の匂……」
「んッー……やん……」
「そればかりなんだから……」

「フビヒただいまクロちゃん！ 良い子にしてたかな？」

「うんッ！ とつてもいい子にしてたんだから」

「でめふ！ それじゃ、お待ちかねのチ○ポだよ？」

「二人で仲良く分けあってね！」

「なんで……クロとこんなことしなきゃいけないの……」

「思いついちゃってね！ 二人は姉妹なのかな？」

「こうして見ると鏡合わせみたいだね！」

「やんッ！ イリヤなんかより、

私のほうがいいんだから……んッ！ ふぁ……」

「なに……どうしたのクロ……なにしてるの……」

「でめふふ！ 流石はクロちゃん！

よくわかってるねえ！ とつてもエロい腰使いだよ！」

「うふふ……お兄ちゃんに寝てもらえるなんて……嬉しい。

んッ！ はぁ……ちッ！」

「ほら、なにしてるの？ イリヤもするのよ？」

「うう……やだよこんなの……絶対ヘンだよ……」

くっくっく

めたや

ズン



「はあッ！ んッ！ ああ……あッ！
カリに引っかけたって……やんッ！」

「ふあッ！ あ……うう……あんッ！」「
「でゅふふ！ プニプニの

ダブルロ○マ○コに挟まれてえ……これは天国！」

「あふッ！ ふああ……んああッ！

「おち○ちんビクビクして……んッ！ あんッ！」

「ハア……あッ！ ふああ……ひんッ！

すっら……ううしてただけで……身体中、

ぞくぞくして……はああッ！」

「相変わらずクロちゃんを感じやすいなあ……
普通の2倍くらいは感じてるんじゃない？」



「い、今はイリヤと一緒にだから……
実際そうかもね……んッ！ はあッ！」

「やめてえクロ……そんな……」

「えっちな顔しないで……声出さないで……」

「な、なんだかこつちまでヘンな気持ちに……
んあッ！ やああッ！」

ぐぶぶぶ
ぬちが
ぬちが
ぬちが

「うんうん」人ともー

「わ、私も……はぁぁッッッ……」

「きゅんッッ……イヤァァァ、また出っっ……ぁぁッッ……はぁぁッッ……はぁぁッッ……」

「すげー……私が射精してるみたい……んッ！はぁッ！」

めめめ

ぐぐぐ

びびび
ぐぐぐ
ぐぐぐ

「ま、まだビクビクしてえ……んッ！あぁぁッッ……」

「でゅふふ！二人とも見分けがつかないくらい

真っ白に染めてあげるぞー！」

「はぁぁッ！かけて！もっとかけてええー！」

「もういらからあ！早く終わってええー！」



「ハアハア……た、たのびり出せたね！ えらいよ二人とも！」

【あッ……はぁぁ……相変わらずすっぴん……噴水みたい……】

「ウウ……アロアロしてえ……気持ちいい……はぁぁ……」

「イリヤってばお子さまねえ……」

「この、魔力がドクドク流れ込んでくる感じがわからない？」

「わかんないよお……どうしちゃったのクロ……もう帰るうよお……」

「はぁぁ……お兄ちゃんの精液……」

「肌をまとわりついて……どうでも気持ちいい……もうとほしな」

「でゅふふー… クロちゃんはロ○ビッチだなぁ……もちろんあびるよー！

今度は美遊ちゃんも入れてね……でゅふふふー！」



「ハアハア……っ、ツルツルのロ○マ○コが……」

「いやあ……見ないで……放してえ……ごんなの絶対おかしだよ……」

《ああ……イリヤ……イリヤがこんな近くだ……》

「ふあッ！ ああ……美遊う……う……いたら……」

「い、いるんなトコ擦れて……」

「あッ！ こんなエッチなカッコ……」

「見られてるだけで、感じちゃう……」

「でゆふ！ どのおマ○コも、濡れ濡れで準備万端みたいだね！」

「ねえお兄ちゃん……」

「いつまでも見てないで、早くちようだ〜い？」

「ど、どのおマ○コも魅力的だなあ……」

「ふひひ！ 誰から食べちゃおうかなあ？」



すめいっ

「ま、まずはイリヤちゃん！」

「ひぐッ！ あッ……ああ……いやあッ！」

「はあッ！ こ、こつちまで感触が流れ込んできて……やあッ！」

「でゆふう！ まだまだ初物の新品感！」

「ヨリヨリ掘り進めるような感触がたまりませんなあ！」

「いあッ！ んッ！ ああ……そ、そんな奥まで挿入れちゃ……やあッ！」

「あッ！ ふあ……ああッ！ な、ナカが太いので広げられちゃう……」

「『』の狭さとキツさ……ふひひ！」

「さっさく出ちやうさうだお！」

「ら、らや……もうあんなのやだあ！ お、お願い抜いてえ！」

「そうから？ ぽはお望み通りだ……」

「ヤッ！ 急に抜いたら……はああッ……」

「ああッ！ 『』りつてえ！」

「ヨリつててえ……ふあッ！ んッ……」

ぜい

ぐやく



いひひ

あはは

すめい

「さあッ！ 次は美遊さんの番だお！」
《きやあうッ！ あッ！ ああ……挿入ってえ……ああッ！！》

「美遊さんは一番早くここに来たから、
もうすっかり僕のカタチに広がっちゃってるね！」
《は、はい……ご主人さまに、
たくさんしてもらったから……ああッ！》

「どうだい？ つい数秒前まで
イリヤちゃんのナカを犯してたチ○ポだよ？」
《う、嬉しいです……はあッ！
い、イリヤのエッチな愛液が、たくさん絡みついてて……》

「やめて美遊……そんなこと言わないでえ……」
《ふあッ！ ああ！ ご主人さま……お、奥まで犯してえ……》
「でゅふふ！ もちろんんだけど……順番だからね！」

おどろき



「お次はクロちゃんだ!」

「きゃんツ! あツ……はああーッツツ!」

「おうツ! クロちゃんはまた挿入ただけでイっちゃったの?」

「だ、だってコレえ……すすすぎて……」

「ぜんぜんガマンできないんだもん……」

「でめふふ! 嬉しいよクロちゃん……」

「今日ほもつともつとイかせてあげるからね!」

「はああツ! つ、強くしちゃ……」

「頭しびれて……んあツ! あああーッツツ!」

「つくう! イリヤちゃん以上の締め付け! ち○こもげそうだお!」

「ああツ! はあツ! んツ……ほ、ホント?」

「イリヤよりも私のほうがいい?」

「そうだなあ……カタチはイリヤちゃんともそっくりなのに……」

「締め付けの力はクロちゃんだなあ」

「やった……うふふふ…… お兄ちゃんに褒められちゃった……」



「さて、ただいまイリヤちゃん！」

『ひぐらッ！ ま、また挿入って……あッ！』

「あうッ！ い、イリヤばかりずるい！」

「ふひひ！ クロちゃんと美遊さんには手マンしてあげるからね！」

《はあッ！ ああ……ご主人さまの指……》

【よ、弱いとこに当たって……ひぐらッ！

た、ただでさえイリヤとダブって感じてるのに……】

「さあ！ みんなぐちゃぐちゃしてあげるからね！」

『はあああ——ッッッ！ いやッ！

だめえ！ そんなに強くしないでえ！』

《い、イリヤの汗が……愛液が……つばが……

らっばらんるら……ちああッ！》

「おち○ほが！ 指が動き回ってえ……

か、感覚がおかしくなる……ああッ！

はああ——ッッ！』

あぁんっ♡

はぁんっ♡



「みんなおはようー！ さあ、今夜もたっぷり遊ぼうね！

調子はどうかなの？」

「はーい……主人さま……ふぁッ！

とっても元気です……あかちゃんも、とっても元気です……」

「んッ！はああ……お腹をグンドン蹴って、この子も期待しています……」

「ねえ早くしよう！

私と赤ちゃんに、たっぷりお兄ちゃんのザーメン注いで欲しいの……」

「でめふふ！三人とも妊娠しちゃうなんて……ホントに仲がいらよおねー！

「もう、あんなに注がれたら、できちゃうに決まってるじゃない……」

「ああ……早く産みたい……ご主人さまのあかちゃん……

きつと、女の子だから」

「そうならたらみんなで親子丼できるなあ……

ハアハアッ！それは楽しみー！」

「うふふー！

「この子が今のママたちの年齢になっても、私たち、×十一歳だもんね〜」

「おははー！すっ〜っ〜……おははははははー！

おはははははは

「それじゃ、らっつものどきり、始めようかー!」

《ほら……んあッ! はああ……》

「んッ! あんッ! あッ……はあん!」

「あう……んうッ! あッ……はああ……」

「でめふふ!」

「一番最初にイッた子から順番だからね!」

『やあ……そんなのまたクロが勝つに決まってるじゃな』

『はあッ! あッ!』

「イリヤってばママになっても文句ばかり……あんッ!」

《はあッ……あッ!》

んッ……主人さま……私すぐイキますから……》

あ……あ……



「はぁあッ！ んう……ねぇ、お兄ちゃん……おかしら……早くちよくだら？」
《私も、もう挿入りますから……あぁ……ほら、いんを濡れて……》

「主人さまぁ……私も……見てえ……」

「こんなたいやらしく広げられるより、ほらぁ……」
「お人ともガマンが足りならなぁ……でゆふー！
挿入れて欲しかったら早くイクんだお！」

「おお、お兄ちゃんのイシワレ……」

《主人さまのおちん○んじやないと、イけならの……》
「あ……お願ひします……犯してんだから……主人さま……」

「あ……お願ひします……犯してんだから……主人さま……」

